

3) C型慢性肝炎に対する IFN α -2b 4週連投
+長期間歇投与法の検討
—上越地区多施設共同研究—

島山 重秋・植木 淳一 (県立中央病院内科)
大矢 実・吉嶺 文俊 (県立妙高病院内科)
藤森 勝也 (県立柿崎病院内科)
森田 幸裕 (厚生連頸南病院
内科)
長谷川 登 (厚生連上越総合
病院内科)
富樫 満・山城 研三 (新潟労災病院内科)
能沢 明宏 (厚生連刈羽郡総合
病院内科)

C型慢性活動性肝炎に対し IFN α -2b 10MU を週6回×4週+週3回×20週投与し次の結果を得た。1. HCV subtype はⅡ型21例Ⅲ型2例であった。2. 投与終了時の HCV-RNA 消失率は15/18 (83.3%)、GPT 正常化率は21/27 (77.7%)であった。3. 投与終了時 GPT が正常化しても早期に再上昇する例が多数みられた。4. 副作用による投与中止例は12/50 (24%)で、うつ、眼底出血、肝機能悪化などがみられた。5. 肝機能悪化のため投与中止した例でも HCV-RNA が消失した例を経験した。

4) 当院におけるC型慢性肝炎の IFN 治療成績と ofloxacin による治療の検討

佐藤 明・岡部 和彦 (聖マリアンナ医科大学
横浜市西部
病院消化器内科)

1. IFN 治療終了後6ヶ月以上経過したC型慢性肝炎73例の治療効果について検討した。IFN は α -2a 9MU、 α -2b 6MU、HLBI 6MU をそれぞれ2週連日後週3回10~24週投与し、効果判定は難治性肝炎班基準 (1994年案) に従い、CR (完全著効)、PR (不完全著効)、NR (無効) に分類した。【成績】genotype 別著効率は2型14% (7/50)、3型62% (8/13)、4型70% (7/10) と2型で低率であった。HCV-RNA 量 (CRT-PCR 法) は2型は3、4型に比し少ない傾向にあったが有意差は見られなかった。しかし、2型においてはCR例はRNA量は少なく ($p=0.001$)、組織進展度は軽微 ($p=0.03$)であった。

2. IFN が無効であった geno. 2型C型肝炎 (CAH 4例、CAH-LD 3例、LC 1例) に ofloxacin 600mg/日を4週間以上投与した。投与4週後の GPT 値は全例で低下し、低下率は平均35% (24.7~45.8%)であった。35%以上の低下を認めた5例中4例で HCV-RNA

量を測定したが投与前後で差はみられなかった。以上より本剤はC型肝炎において肝機能改善効果を有するが、抗ウイルス効果は期待し難いと考えられた。

5) 当院のC型慢性肝炎に対するインターフェロン治療について
—特に治療前後の組織学的検討—

原 秀範・堀 聡彦 (新潟県立新発田
篠原 敏弘・関根 輝夫 (病院内科)
上村 朝輝 (新潟大学第三内科)

当院のC型慢性肝炎に対するインターフェロン治療は24例で、そのうち15例は投与終了後6か月以上経過観察し、12例で治療前及び投与終了後6か月目の組織学的検討を行った。GPT 変化による有効性は46.7%で、有効例では組織学的にも改善する例が多かった。特に小葉内の壊死炎症反応は改善度が強く認められたが、門脈域の細胞浸潤、限界板の破壊、線維化の高度例ではインターフェロン療法に反応しない傾向があった。又、肝機能、組織学的検討の他に、ウイルス学的並びにインターフェロン投与量についてさらに検討を要する症例もみられた。

6) 肝細胞癌切除後 IFN を投与したC型慢性肝炎の1例

山際 訓・曾我津也子
河合 弘一・柳沢 善計 (信楽園病院
村山 久夫 (消化器内科)
清水 武昭・佐藤 攻
宗岡 勝樹 (同 外科)

症例は66歳男性。40歳時肝機能異常を指摘。平成5年3月12日 HCV 抗体陽性を指摘され、IFN 療法目的に同年4月19日に当科を初診。腹部CTにて肝S5に腫瘤影を指摘され入院。GOT 94 IU/l、GPT 135 IU/l、PIVKA-II 0.2 AU/ml、AFP 8.4 ng/ml。HCV 抗体 (C100-3 抗体) の index は 19.8。HVC-RNA (+)。腹部血管造影等よりC型慢性肝炎に合併した肝S5の肝細胞癌と診断し、同年6月2日部分肝切除を施行。腫瘍は高~中分化型肝細胞癌であり径 2.5×2.2 cm。非腫瘍部は慢性活動性肝炎と診断された。術後第13日目から天然型 IFN- α の投与を開始。2週間は600万単位連日、以後600万単位を週3回、計24週間投与した。投与期間中に HCV-RNA は陰性となり、GOT、GPT は正常化。術後9ヶ月後の現在も肝癌再発は認めていない。